

Part 3

十勝平野の成り立ち

スライド 9

十勝平野の形成は約 1300 万年前に 2 つの大陸性のマイクロプレート、オホーツクプレートおよびアムールプレートが衝突して日高山脈が隆起し始めた時に始まりました。

衝突による地殻のめくれ上がりの証拠はアポイ岳周辺の地質によって見ることが出来ます。

日高山脈のでき方につきましては、木村・宮坂・亀田著の「揺れ動く大地プレートと北海道」という本の説明が一番分かり易かったです。

スライド 10

更新世前期(258 万年前から 78 万年前)を通じて十勝平野は外洋につながる入江でした。そのなかで 200 万年から 100 万年前に分布していた内湾は「長流枝内の海」と呼ばれ、池田町と幕別町でクジラの化石が発掘されています。また 100 万年前には十勝三股カルデラが大噴火し十勝平野には大規模な火砕流を押し流し、根釧地方には多量の火山灰を降らしました。

スライド 11

更新世中期(77.4 万年前から 12.9 万年前)の間には、日高山脈が隆起するとともに、多量の土砂と礫が平野に堆積しました。この時代の定義に際しては日本人研究者たちの貢献が大きく、チバニアン期と呼ばれることになりました。

北京原人やネアンデルタール人、デニソワ人などの旧人は、すでにユーラシア大陸で活動していたことが知られていますが、北海道まで来ていたかどうかはわかっていません。

ナウマンゾウは本州には 36 万年ほど前から来ていましたが、北海道には最終間氷期である 12 万年ほど前に来ていて、更新世終期の 2 万 7 千年ほど前まで生息していました。

スライド 12

更新世後期(13万年前から4万年前)までは洞爺、クッタラ、支笏などの火山活動が活発になり、多量の火山灰が日高山脈を越えて十勝平野に堆積しました。また、クッチャロ・羽幌火山灰も十勝平野を覆いました。気候は温暖な間氷期から寒冷な最終氷期へと変化していきました。

約6万8千年前にホモサピエンスはアフリカ東部からアラビア半島に渡り、その後世界各地に移動していきました。4万年前にはアジア大陸には来ていましたが、日本にはまだ到達していなかったようです。

スライド 13

更新世終期(4万年前から1万年前)には支笏火山や恵庭火山の大きな噴火がありました。恵庭火山が噴火した頃は最終氷期の中でも最も寒冷な時期でした。

この時代、ケナガマンモスも北の大陸から南下してきており、一時期ナウマンゾウとも共存していました。

その後気候は温暖化し始めましたが、1万2900年前から1万1700年前にヤンガードリアス期という再寒冷化の時期があり、農耕の開始など人類の活動に大きな影響を及ぼしました。ヤンガードリアス期の終了をもって更新世も終了し、それ以降は完新世と定義されています。野生動物を狩る旧石器人の活動は恵庭火山灰の降灰前から明らかになっています。

帯広の若葉の森遺跡では、3万年前と推定される北海道最古かつ日本最古の細石刃石器が発掘されました。この遺跡の住人は、陸地となっていた宗谷サハリン海峡を渡ってきた人たちです。

また、大正3遺跡では1万年4000年前と推定される北海道最古の縄文時代草創期の土器が発掘されました。

スライド 14

完新世には気候が温暖化し、約6000年前には海岸線が最も内陸まで進行しました。樽前火山の数次にわたる噴火(d, c, b, a)、有珠(AD1663)、駒ヶ岳c₂(AD1694)などの火山灰も降灰しました。

この時期には人類の活動も活発になり、縄文文化・続縄文文化・アイヌ文化が長期にわたって栄えました。

八千代遺跡では、8千年前と推定される全国屈指規模の縄文時代早期の竪穴式住居跡が発掘されました。

これらのことから、人類の歴史においても、旧石器時代から縄文時代にかけて、十勝は最も早く人が住み始め、文化が進んだ土地であったことがわかります。

スライド 15

更新世中期から完新世にかけては、地形の隆起、河川による山地と丘陵の侵食、低地への土砂の堆積が繰り返されるうちに、数段にわたる段丘地形が形成されました。

とくに氷河期には陸地の侵食が進み、間氷期には平野への土砂の堆積が進みました。

スライド 16

火山が噴火するごとに地形面全体が火山灰で覆われますが、これらは河川による侵食が進むと失われてしまいます。

その結果、高い段丘ではより古い火山灰が残され、低位の段丘や低地では新しい火山灰層しか残っていません。

スライド 17

火山灰の降灰と堆積は十勝地域の土壌に大きな影響を及ぼしました。

この図は著名なペドロジストである松井・永塚によって作成された日本土壌資源図のうち北海道の部分を示したのですが、十勝平野と根釧平野には幅広く火山灰の影響を受けた黒ボク土が分布していることがわかります。